

研究ノート

高齢者の住居移動による自尊感情の実態調査

—— 呼び寄せ高齢者と地元高齢者の比較 ——

兎澤 恵子¹⁾The Research on which the Relocation of Elderly Persons
Bring about an Effect on Their Self-Esteem

—— Comparison of the Relocated Elderly and the Local Elderly ——

Keiko TOZAWA¹⁾

要 旨

高齢者がいかに健康で長寿を全うするかは重要なことである。1980年以降、1990年代から、高齢期に転居率が高まる現象が注目されるようになり、都市部に暮らす子どもの元へ高齢者が呼び寄せられるという現象が起こり始めた。その後の変化が危惧される。

本研究では、「呼び寄せ高齢者」と「地元高齢者」との比較を行い、高齢者の自尊感情を明らかにすることをめざして、予備調査を行うことを目的とした。研究方法は、Rosenbergの自尊感情尺度(Self-Esteem Scale)を用いて、街頭調査法によるインタビューを実施した。

その結果、「呼び寄せ高齢者」の自尊感情は 27.8 ± 4.8 (mean \pm SD)、「地元高齢者」の自尊感情 30.8 ± 2.2 (mean \pm SD)を比較して、「呼び寄せ高齢者」の自尊感情は有意に低いことが示唆された。また、「呼び寄せ高齢者」の自尊感情は、「自分はてんでだめだ」「自分は失敗者だと思いがちである」ことに影響していた。そして、関連要因においては、住居移動時の自己選択の程度や、家族及び社会における役割の有無、友達や後悔の程度など、環境の変化が自尊感情に影響を与える可能性があることが示唆された。

今回の予備調査は、より確かな調査を可能にするための多くの示唆を得ることができた。

キーワード：住居の移動、呼び寄せ高齢者、地元高齢者、自尊感情、予備調査

I. 緒 言

高齢者が満足できるような生活を送るためには、いかに自分を尊重できるかが重要な課題となってくる¹⁾。また、高齢者の多くは、住み慣れた土地で穏やかに老いることを望んでいるように推察される。現実的には、加齢に伴う身体的変化や住環境の変化、慎み深さなどにより、自尊心の維持が困難になり、豊かに老いることを複雑にしているのではないかと懸念される。

住居の移動については、1980年代以降、1990年代から都市部に暮らす子供宅へ高齢者が呼び寄せられる、いわゆる「呼び寄せ老人」という現象が指摘され始めた。「呼び寄せ老人」については、転居先に友人がなく、閉じこもりがちな生活により痴呆や寝たきりに移行する可能性がある²⁾ことが明らかにされている。

一方、自尊感情に関する先行研究では、高齢者は高齢による身体機能の低下や社会的役割の喪失から、自己否定や自己への不満足を感じ、自尊感情を低下させる傾向にあるとする内容が目立つ^{3,4)}。特に、地域の高

1) 群馬パース学園短期大学看護学科

高齢者サロン参加者を対象とした研究では、生活満足度や主観的健康観と自尊感情との得点に相関関係がある¹⁾と指摘されている。在宅療養者を対象とした研究においても、醜態、役割遂行低下、依存など無価値とみなされることが病気によりもたらされることによって自尊感情が低下する²⁾、と述べている。これらのことから、地域に暮らす高齢者では、加齢による身体的変化や病気、日常生活満足度など、複数の理由の存在が自尊感情に影響していることが明らかにされてきた。しかしながら、住居を移動した「呼び寄せ高齢者」の自尊感情について検討した研究は少ない。

健やかな長寿を日常生活に育むには、高齢者の意欲や能力に応じた全人的な生き方が重要である³⁾、という考え方を基に、子供の元へ住居を移動し、地域で生活を送っている「呼び寄せ高齢者」の自尊感情はどのように保たれているか、「地元高齢者」との比較を通してその実態を明らかにしたいと考える。今回は、その予備調査を行うことを目的とする。

用語の定義

本研究における用語を以下のように定義した。

「呼び寄せ高齢者」：過去10年以内に住み慣れた場所を離れ、子供の元に住居を移動した高齢者。

「地元高齢者」：生まれた土地に継続して居住している高齢者。

自尊感情 self-esteem：人が自分の自己概念と関連づける個人的価値及び能力の感覚⁵⁾。自分自身について

の感じ方。自分自身を好ましい人間と感じ、価値あるものとして評価すること。

II. 研究方法

1. 調査対象

調査地域とした東京都のI市は、都の西北部に位置し、ニュータウンの拡張により1999年から2005年までに8,646人の人口増加をみている新興住宅地である。2004年の都の高齢化率は18.0%であるのに対し、I市の高齢化率は2000年(11.3%)、2005年(14.1%)である。

新興住宅地を選定した理由は、新築の家を購入した子供と同居するために住居移動をすることが多いと予測されたことなどによる。

対象者の性別は、男女40名(男性18名、女性22名)、対象者の平均年齢は70.9歳で、前期高齢者27名(68%)後期高齢者13名(32%)であり、前期高齢者は後期高齢者の約2倍を占めた。内訳は、「呼び寄せ高齢者」14名、「地元高齢者」26名で、詳細については、表1にまとめた。

2. 調査期間および方法

初回調査の2000年は、介護保健法の見直しが行われて新たにスタートし、二回目調査の2005年は、活力ある高齢者像の構築に向けて、高齢者への介護システムやサービス内容が大いに変化して5年が経過した社会

表1 対象者の属性と自尊感情得点

n=40

属性	1回目(2000年)			2回目(2005年)		
	合計	呼び寄せ高齢者 n=9	地元高齢者 n=21	呼び寄せ高齢者 n=5	地元高齢者 n=5	
平均値		26.8*	31.6**	28.8	30.0	
標準偏差		3.87	3.22	5.63	1.22	
性別	女性	22(55%)	26.4	31.4	26.0	31.0
	男性	18(45%)	28.0	31.7	30.7	29.3
年齢	前期高齢者(年齢) 65歳~74歳	27(68%)	26.7	32	26.7*注1	30.7
	後期高齢者(年齢) 75歳~89歳	13(32%)	27.0	30.9	32.0	29.5
	平均年齢(歳)		69.7	68.7	70.8	74.2
関連要因		2.73*	3.22**	3.08	3.08	
合計		40(100%)				

数(%) サンプル間：Mann-Whitney検定 ** p<0.01 * p<0.05 注1 t-検定 * p<0.05

背景がある。

一般住民を対象とし、地域の商店街において街頭調査法を用いてインタビューを実施した。

3. 調査項目

1) 自尊感情尺度

自尊感情尺度 (Self-esteem Scale) は、Rosenberg が作成した尺度を、遠藤らが臨床的テスト法に焦点をあてまとめた出版物に掲載されたものを用いた⁹⁾。高齢者の自尊感情に関する研究は、Rosenberg の尺度が最も多く使用されている。また、尺度は、肯定的質問 5 項目、否定的質問 5 項目から構成されており、10 項目からなる質問を 4 件法で求める。詳細は、「よくそう思う」4 点、「ときにそう思う」3 点、「あまり思わない」2 点、「まったく思わない」1 点とし、合計得点 40 (10~40) で評価を行う。自尊感情得点が高くなるに伴い自己全体を肯定的にとらえ、高く評価していることを示す。

Rosenberg の判断基準は、自尊感情に 2 つの「とてもよい」と「これでよい」という内包的な意味の観点があり、他者と比較するのではなく、自己が設定した評価基準に照らして自分を受容する (self-acceptance) ことであり、自分に好意をいだき (self-liking)、自分を尊重すること (self-respect) としている⁹⁾。

2) 関連要因に関する独自の質問尺度

「呼び寄せ高齢者」が「地元高齢者」より自尊感情が低値であると仮定した場合に想定される内容を、関連要因として取り上げ、筆者独自の質問内容として 5 項目を加えた。①今ここにいるのは自分で選んだことである (以後、「自己選択」)、②私は家族の中で自分の役割をもっている (以後、「家族役割」)、③私は社会の中で自分の役割をもっている (以後、「社会役割」)、④私はしたことを後悔することが多い (以後、「後悔」)、⑤私は友達がいる (以後、「友達」) の 5 項目である。この尺度は、自尊感情尺度と同様に 4 件法で、4 点が最も高く、1 点が低い。

4. 分析方法

「呼び寄せ高齢者」と「地元高齢者」のサンプルごとの比較に、Mann-Whitney の U 検定を用いた。また、属性に関する項目内の差の比較に t-検定を、自尊感情尺度および関連要因に関する項目ごとの平均値の比較にはカイ二乗検定、Pearson の相関係数を用いた。

尚、検定には、統計解析パッケージ SPSS11.0 を使用

し統計学的解析を行った。

5. 倫理的配慮

インタビュー調査を実施する際に、対象者に主旨と方法を十分説明し、その都度了解を得ながら実施した。インタビュー導入時には研究者の立場を説明すると共に、回答によって得た内容を他に漏らさないこと、他に用いないこと、参加協力は自由意思であること、データ取り扱いなどの説明を充分に行い、了解を得た。

III. 研究結果

1. 自尊感情得点について

自尊感情および関連要因の項目に関する平均値および標準偏差、検定結果については表 2 に示した。

初回 (2000年) の調査結果において、「呼び寄せ高齢者」の平均値は 26.8 ± 3.87 、「地元高齢者」の平均値は 31.6 ± 3.22 であり、「地元高齢者」の自尊感情が有意に高い (Mann-Whitney の検定 $P < 0.0001$)。二回目 (2005年) の調査結果では、「呼び寄せ高齢者」の平均値は 28.8 ± 5.63 、「地元高齢者」の平均値は 30.0 ± 1.22 であり、やはり「地元高齢者」の自尊感情が高い。これらの 4 つのサンプルにおける比較では、「呼び寄せ高齢者」(26.8 ± 3.87) が低く、「地元高齢者」(31.6 ± 3.22) が有意に高い結果を示した。

男女別の比較では有意差はなく、年齢別の比較では二回目の「呼び寄せ高齢者」の年齢別前期後期において有意差は認められた (t-検定 $P < 0.05$)。

自尊感情尺度の項目別の平均値は、初回の「呼び寄せ高齢者」は、「自分がてんでだめだと思う」2.0 で、二回目の「呼び寄せ高齢者」の「失敗者だと思いがちである」2.0 と等しく最も低い。高い項目は、「自分に前向きである」「人がやれる程度はやれる」3.5~3.6 であった。また、初回の「地元高齢者」は、「得意に思うことがない」以外のいずれの項目でも平均値が有意に高く、他のサンプルにおいては有意差を示さなかった (カイ二乗検定 $P < 0.0001 \sim 0.05$)。

2. 関連要因得点について

関連要因 5 項目の相関関係は、サンプルごとに表 3 に示した。

1) 関連要因の平均値

関連要因に関するサンプル間の平均値の比較では、自尊感情得点と同様に初回の「呼び寄せ高齢者」と「地

表2 自尊感情尺度および関連要因項目と結果

n = 40

Self-Esteem Scale (標準偏差)	2000年		2005年	
	呼び寄せ高齢者 n = 9	地元高齢者 n = 21	呼び寄せ高齢者 n = 5	地元高齢者 n = 5
1. 自分に満足している	2.9	3.1 * *	3	3.4
	0.601	0.74	0.707	0.548
2. 自分がてんでためだと思う*	2	2.9 *	2.4	2.8
	0.866	0.996	0.894	0.837
3. いくつか見所がある	2.2	2.9 *	2.8	3.4
	0.972	0.964	0.447	0.548
4. 人がやれる程度はやれる	3.1	3.5 *	3.4	3.4
	0.601	0.511	0.894	0.548
5. 得意に思うことがない*	2.7	3.1	3.4	2.8
	0.866	0.669	0.548	0.447
6. 役立たずだと感じる*	2.9	3.4 * *	2.8	2.6
	0.601	0.811	0.837	0.894
7. 他人と同レベルの価値がある	2.7	3.3 *	3	2.8
	0.5	0.561	0.707	0.837
8. もう少し尊敬できたらと思う*	2.9	2.9 *	2.6	2.6
	0.601	0.573	1.14	0.894
9. 失敗者だと思いがちである*	2.7	3.1 * *	2	2.6
	0.5	0.498	1	1.14
10) 自分に前向きな態度である	2.8	3.6 *	3.4	3.6
	0.972	0.589	0.894	0.548
関連要因 (標準偏差)				
11. 自分で選んだ	3	3.2	3.2	3.2
	0.707	0.625	0.837	0.837
12. 家族の中で役割をもっている	2.9	3.4 * *	3	2.8
	1.17	0.921	0	1.09
13. 社会の中で役割をもっている	2.4	3	3	3
	1.03	0.775	1	0.707
14. 後悔することが多い*	2.3	2.9	2.6	3
	0.5	0.793	0.894	0.707
15. 友達がいる	3	3.7	3.6	3.4
	0.866	0.483	0.548	0.548

* 反転項目 カイ2乗検定 * * * P < 0.0001 * * P < 0.001 * P < 0.05

元高齢者」とで有意差を認めた (Mann-Whitney の検定 $P < 0.01 \sim 0.05$)。二回目は同数であった。

この結果における関連要因の差は、「自己選択」、「家族役割」、「社会役割」、「後悔」、「友達」の全ての項目において、「呼び寄せ高齢者」は「地元高齢者」に比較して低値を示した。特に、「地元高齢者」は「家族役割」において有意差を示した (カイ二乗検定 $P < 0.001$)。

2) 関連要因における相関関係

関連要因の5項目を相関係数でみると、初回の「呼び寄せ高齢者」と「地元高齢者」との間に有意差が見られた (Pearson の相関係数 $P < 0.01 \sim 0.5$)。

「自己選択」と「後悔」「社会役割」は正の相関関係にあり有意差を示した。「家族役割」と「社会役割」、「社会役割」と「友達」との間に正の相関関係にあった。また、サンプル間の関係では、「家族役割」と「社会役割」との相関関係は初回の「呼び寄せ高齢者」と2回目の「地元高齢者」の間に、「社会役割」と「友達」の相関関係は初回の「地元高齢者」と2回目の「呼び寄せ高齢者」で見られた。詳細は、表3に示した。

表3 関連要因における相関係数の結果

n = 40

サンプル名	関連要因	11. 自己選択	12. 家庭役割	13. 社会役割	14. 後悔
呼び寄せ高齢者 (’00)	11. 自己選択				
	12. 家庭役割	0.606			
	13. 社会役割	0.523	0.719 *		
	14. 後悔	0.354	0.433	0.426	
	15. 友達	0.204	0.553	0.621	0.209
地元高齢者 (’00)	11. 自己選択				
	12. 家庭役割	0.095			
	13. 社会役割	0.027	0.21		
	14. 後悔	0.375 *	-0.127	0.326	
	15. 友達	-0.055	0.187	0.535 *	0.131
呼び寄せ高齢者 (’05)	11. 自己選択				
	12. 家庭役割	0.279			
	13. 社会役割	0.913 * *			
	14. 後悔	-0.298		0.279	
	15. 友達	0.228		0.091 *	0.612
地元高齢者 (’05)	11. 自己選択				
	12. 家庭役割	-0.491			
	13. 社会役割	0.423	-0.968 * *		
	14. 後悔	0.845	-0.645	0.391	
	15. 友達	0.873	-0.667	0.645	0.645

Pearsonの相関係数 ** p<0.01 * p<0.05

IV. 考 察

1. 「呼び寄せ高齢者」と「地元高齢者」の比較

「呼び寄せ高齢者」の存在が注目されるようになってから約30年が経ち、社会は活力ある高齢者像の構築、高齢者の尊厳の確保と自立支援、支え合う地域社会の形成、介護サービスの確立などを目指して努力している背景がある。

1) 「呼び寄せ高齢者」の自尊感情得点

本研究では、新興住宅地における高齢者の自尊感情尺度の実態予備調査において、「呼び寄せ高齢者」は「地元高齢者」に比較して自尊感情が低いことが示唆された。また、「呼び寄せ高齢者」の自尊感情が低値に影響した項目は、「自分がてんでだめだ」「自分が失敗者だと思いがちである」であった。

このことから、住居を移動したことが、環境に馴染めない、また、環境の変化が家族や社会の中での役割を減少させ、友達の数に影響し、後悔を強め自尊感情に影響している可能性が示唆された。しかし、二回目の「呼び寄せ高齢者」では、「家族役割」や「友達」が「地元高齢者」より増加していることは、経時的な視

点から総合的にみると、高齢化率が急速に上昇しているという情報が、周囲や多くの高齢者の自立心を刺激し、高齢社会に対する施策と共に取り組みが広く伝播していることの影響ではないかと考えられる。

2) 年齢と自尊感情

職業の有無は、性別にかかわらず自尊感情のレベルに有意な影響をおよぼし、職業を持っている方が自尊感情を高く維持している⁶⁾、ということが明らかにされている。

本研究の「地元高齢者」の自尊感情は、「呼び寄せ高齢者」と比較して高値であった。この結果は、対象者の平均年齢が約70.9歳であり、前期高齢者であることを考えると、社会参加能力を有していることが充分推察される。活動が可能な時期での居住の移動は、自尊感情にプラスに影響することも考えられる。このことは、高齢者の自尊感情は心身の健康だけでなく経済的側面、社会活動能力や交流頻度に影響する⁶⁾、という結果に一致を見ることができる。つまり、「地元高齢者」は、先祖代々の土地や住居の確保、地域との交流の深さなどから、社会的交流の維持や発展が可能であり、容易であろうと考えられる。

3) 性別と自尊感情

本研究において、男性は女性よりも高い自尊感情を示した。性差が生じた背景には、男性は仕事の現役から退いても、年金や就労時の賃金を資源として持っていることもあって経済力の面で自負心を持っており、これが男性高齢者の自尊心を高めていると考えられている。他方、女性は、生活的サポートである家事の援助や病気の世話など日常生活上行ってきたことが老年期以降の自尊感情に影響する⁷⁾と言われている。

しかし、近年女性の社会進出により、経済的基盤や生活スタイルに変化がみられることが、二回目の「地元高齢者」の女性が男性の自尊感情得点を上回ったことに反映しているのではないかと考える。

今後の課題は、家族の形態、持ち家の有無、配偶者の有無、職業の有無、地域との交流、趣味などを加味しながら検討して行く必要があろうと考える。

2. 自尊感情に影響する関連要因について

「呼び寄せ高齢者」の自尊感情が低値であった場合、考えられる関連要因5項目を設定した。

先行研究における住居移動の理由では、「健康不安」「仕事の都合や退職」が最も多いとするものがある⁷⁾。

本研究においては、5項目全てにおいて「呼び寄せ高齢者」が低値であった。特に「自己選択」については、社会における役割の低下や後悔することが多いことと相関していることが示唆された。後悔の理由は、健康への不安や仕事からの開放感が充実感の喪失に変化したりするものであることが予測されるが、住居移動後に気づくかまたは予想を超えて発生するような出来事や後悔の念は、その後どのように解決して行っているのか、明らかにした文献は見つからない。しかし、後悔の念が生じた場合でも、自分で選択したということが自分自身を納得させる際に必要な要素となる可能性がある。そういった意味で、住居移動の決定に自分自身の考えを反映させることが重要であり、心の整理に影響して行く可能性がある。

次に、「家族役割」については、「地元高齢者」が高く、社会の中で役割があることと反比例している傾向があることが示唆された。

家事は女性が当然しなければならないことで、誰からも喜ばれることではないと思われがちであることや、家庭での役割を担っている人は75%あり、役割だけでなく頼りにされていると感じることで自尊感情が高まるという結果を得ている⁷⁾。これらのことから、

「呼び寄せ高齢者」は、家族関係を背景にした役割分担が、家族相互の遠慮などによりうまく行かないのではないかと考えられる。

「社会役割」については、「地元高齢者」が高いことが示唆された。このことは、高齢者の自尊感情は心身の状況や生活環境要因、伝統的な地域における行事や祭事への参加およびそれを担う役割の存在がQOLを高め、自尊感情に影響している可能性がある⁸⁾と言われるように、長年培ってきた関わりが影響していると考えられる。新興住宅地においては、地域全体での行事が少ないことが予測され、行われていても積極的に参加するに至っていないことも懸念される。しかし、地域との相互関係や周囲のサポート、交流頻度は自尊感情に影響しており^{9,10)}、必要であると考えられる。

「後悔」については、本研究において、「呼び寄せ高齢者」が低値であることが示唆された。しかし、「地元高齢者」にも低値を示すものが存在した。このことから、人は誰でも、時には過去の判断や行動が間違っていたのではないかと悔やむことがあり、悔やむ感情は自己受容を妨げることになる。その原因は家族の中にあり、また穏やかな精神状態の保持を支えて行くのも家族の中にあるものとする。核家族の今日、家族の重要性を再認識する必要性を実感するに至った。

「友達」については、本研究においては、サンプル間に違いを認めた。友達の存在は日常生活に張り合いや安心感をもたらす、内面的な拠り所となる存在として重要である。

先行研究において、転居が自発的なものであるか、強制的なものであるかによって高齢者の健康に与える影響が異なることや、健康状態の低下した者、社会的関係の少ない者では転居後の適応が良好でない¹¹⁾と述べている。街頭インタビュー時においては、病気である様子を認めなかった。しかしながら、健康であるからといって自発度が高いとはいえない。そして、自発性、つまり自己選択に関する自尊感情の程度は、いずれも同程度であることから、様々な状況において納得していることが伺える。同時に、その人の意欲や能力に応じた全人的なものかどうか、どのように捉えることが可能か、今後の課題となる根本的な問いかけに関する示唆を得た。

3. 高齢者の自尊感情について

大都市郊外の自治体に転入してきた高齢者のニーズ調査では、転居群は対象群と比較し、主観的健康観や

日常生活動作能力、外出頻度に有意差はなく、抑うつ度や孤独感が高く、社会的ネットワークを持つ割合が低いことや有配偶者の割合が低いなどの傾向があるが、転居が精神的健康におよぼす直接影響、間接影響、総合影響を検討した結果では、全体として転居が必ずしもストレスの多い生活出来事ではない可能性がある²⁾、と述べられている。

本研究では、どのサンプルにおいても後悔することが多い結果を得た。しかし、経時的にみると、友達や家族での役割が増加傾向にあることから、環境によっては住居の移動が必ずしもストレスが高いとは言えない可能性があり、この点で先行研究に一致していると言える。

また、自尊感情尺度は、人生に対する満足度の測定となり、活動性が高い人は人生に強い満足感をいただき、活動性の低い人は人生に不満感をもっていることがあきらかにされ、年齢に対応して、役割活動性を失うことにたいする無念さの強い表出であると考えられている。そのことによって全体的な自尊心を失うことはなく、老人が活動性の低下に適応できるという事実は、あきらめの気持ちで受け入れることができるからだと考えることが妥当である¹⁾と述べられている。このことから、本研究における時間的経過のなかでサンプル間に変化が見られたことは、前向きに自己受容ができる方向で変化している可能性があることが考えられる。

本研究において、「呼び寄せ高齢者」の自尊感情は、前期高齢者において低値であり、後期高齢者に高値を示し、「地元高齢者」は前期高齢者において高値であり後期高齢者において低値を示した。このことから、高齢者の自尊感情は、住居移動により事実をあきらめの気持ちで受け入れることが、前期高齢者の時期より不可能であることが考えられる。同様に、「地元高齢者」の事実への受容は、後期高齢者になってわずかに下がるが、他の要因を含んでいる可能性があると考えられる。

高齢者の表情に穏やかさを保つには、高齢者の意欲と能力に応じた全人的な生き方を見極め、どのような状況にあってもその状況を受け止めることの出来る暖かなサポーターの存在が必要であると考えられる。そして、高齢者は、肯定的な意味で自分の現状を納得することが必要であることが示唆された。

この研究の限界として、影響要因の調査内容を限定したこと、また、街頭調査法により、不意に呼び止められたことによる戸惑いや時間的制約、場所の制約に

よる反応の制約などを考慮する必要がある。

今回の予備調査から、より確実な実態調査を可能にするための多くの示唆を得ることができた。

高齢者が少しでも穏やかに長寿を全うできるように必要な要素を明らかにして行きたいと考える。

V. 結 語

本研究において、新興住宅地で生活を営んでいる「呼び寄せ高齢者」の自尊感情について調査を実施した。得られた回答は、次のとおりであった。

1. 自尊感情は、「呼び寄せ高齢者」 27.8 ± 4.8 、「地元高齢者」 30.8 ± 2.2 であり、「呼び寄せ高齢者」が有意に低値を示した。特に、自分はだめだ、失敗者だと思いがちであることが影響していることが示唆された。
2. 「呼び寄せ高齢者」の自尊感情への関連要因とした5項目は、すべて低値を示した。内容は、「自己選択」、「家族役割」、「社会役割」、「後悔」、「友達」と関連していた。特に、家族の中で役割をもっているかどうかが高齢者の自尊感情に影響する可能性があることが示唆された。
3. 自尊感情の年齢別の比較では、「呼び寄せ高齢者」は、後期高齢者より前期高齢者の自尊感情で低値を示した。「地元高齢者」は後期高齢者の方が低値を示した。このことから、「呼び寄せ高齢者」は、事実を認め、自己を受け止めるということに時間を要するが、「地元高齢者」は早期に自己を受け止める可能性があることが示唆された。
4. 自尊感情の男女別の比較では、「呼び寄せ高齢者」の男性と比較して女性が低値を示した。しかし、「地元高齢者」の初回は男性が高値を示し、二回目は女性が高値を示した。このことから、経済的確保と地域交流の視点から、女性の社会進出による経済的変化が影響している可能性があることが示唆された。
5. 自尊感情を知ることの意味は、自尊感情の低下が生きる意欲の低下に影響していることを知ることで高齢者の反応に対する理解が深まることであった。そして、高齢者自身が様々な出来事や思いに対する事実を受け止め、「これでよい」と現状認識に至る働きかけを持つことに「呼び寄せ高齢者」へのケアの意味が存在することが示唆された。

文 献

- 1) 北村隆子・白井キミカ・筒井裕子：地域サロン参加による高齢者の自尊感情を及ぼす要因。人間看護学研究。3：1-9, 2004.
- 2) 齊藤 民・甲斐一郎：高齢転居者の社会的孤立と介護予防。公衆衛生 69(9)：713-717, 2005おい
- 3) 水野敏子：「呼び寄せ」老人の実態から探る保健婦の役割—調査結果にみるリスクの少ない呼び寄せ方、もとめられるサポーター。生活教育42 (12)：7-11, 1998.
- 4) 興古田孝夫：日常生活における長寿とメンタルヘルス—特集・長寿医学と生活習慣病の克服—。成人病と生活習慣病 35(7)：750-754おい
- 5) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽編：セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—。京都：アカシヤ出版 (7)：2004.
- 6) 米澤弘恵・石津みゑ子・甲斐一郎：在宅高齢者の孤独感と同居家族、別居子、友人・知人との関係—家族形態による比較—：Health Sciences 3(18)：194-206, 2002.
- 7) 大和三重・前田大作・野口裕二他：日本の高齢者の自尊感情とその要因分析。老年社会学 (12)：147-167, 1990.
- 8) 興古田孝夫・赤嶺依子・具志堅美智子：沖縄における地域高齢者の self-esteem (自尊感情) とその関連要因についての検討—。医学と生物学 144(5)：147-151, 2002.
- 9) 塚原節子・廣川吏英子：地域障害者の外出行動や家庭内役割と自己効力感との関係。日本看護研究学会雑誌 27(3)：137, 2004.
- 10) 齊藤 民・李 賢情・甲斐一郎：高齢転居者への社会的孤立予防プログラム実施とその効果評価の試み。老年社会学 27(2)：243, 2005.
- 11) 齊藤 民・杉澤秀博・杉原陽子他：高齢者の転居の精神的健康への影響に関する研究。公衆衛生 47(10)：856-865, 2000.